

Program Notes

寺西基之(音楽評論家)

ベーメ：トランペット協奏曲 へ短調 Op.18

オスカー・ベーメ(1870-1938)はドレスデン近郊に生まれ、ライプツィヒで音楽教育を受けた。ブダペスト歌劇場でトランペット奏者を務めた後、1897年にロシアへ移住し、以後はトランペット奏者・コルネット奏者としてベテルブルクのマリンスキー劇場などで活動するかたわら、トランペットをはじめとする金管のための曲を多数書いている。しかしソヴィエト連邦となったロシアでスターリンが政権を握ってからは外国人排斥の動きが高まり、ドイツ系だったベーメは反国家的な罪を着せられてカザフスタンに近いオレンブルクに追放され、ここで処刑されたと伝えられている。

彼の代表作のひとつに挙げられる本日のトランペット協奏曲は楽器の特性と技巧性を存分に発揮したロマンティックな作品で、19世紀ロマン派時代のきわめて数少ないトランペット協奏曲として好んで取り上げられている。もともとはA管のトランペット用に作曲されて1899年に出版された作品で、調性もホ短調だったが、その後A管のトランペットが廃れてしまったことで、一般的なB♭管で演奏できるように作曲者死後の20世紀半ばになってへ短調の楽譜が出され、以後へ短調の協奏曲として演奏されてきた。

第1楽章(アレグロ・モデラート)は、管弦楽による序奏を受け継いでトランペットが表情豊かな第1主題を吹き、伸びやかな広がりを持つ第2主題が続く。以後技巧的なパッセージを連ねつつ展開し、再現部の後、カデンツァを経てピウ・モッソの急速なコーダに至る。第2楽章(アンダンテ・レリジョーソ)は、トランペットのカンタービレが存分に生かされた叙情豊かな緩徐楽章。第3楽章(アレグレット〜ロンド、アレグロ・スケルツァンド)は主部の主題を先取りする経過的な序奏に続いて、長調の軽快なロンド主題をトランペットが奏で、快活な発展を繰り広げていく。

J.シュトラウスII：春の声 Op.410

ヨハン・シュトラウスII世(1825-99)は、父ヨハンI世やヨーゼフ・ランナーらが確立したウィンナ・ワルツとポルカのスタイルに洗練と深みを与え、このジャンルの黄金時代を築いた。「春の声」は円熟期の1883年に作曲した華やいだ名ワルツ。彼は1882年にブダペストを訪れたが、その際あるパーティに出席した。ここで彼は即興的にワルツを披露したが、「春の声」はその時の曲がもとになっている。当初名ソプラノのピアンカ・ピアンキのために、コロラトゥーラの技巧を生かした歌付きのワルツとして書かれ、その後管弦楽だけの版も作られた。序奏が短くてすぐに主部の主題が示され、程なくその主題が再現されるといった、シュトラウスのワルツとしては異例な構成をとっている。

オッフェンバック：オペラ『ホフマン物語』より「生け垣に小鳥たちが」

ジャック・オッフェンバック(1819-80)はドイツ出身ながら、パリ音楽院で勉強、やがてフランスの作曲家として頭角を現し、特に『天国と地獄』などオペレッタの分野で大きな名声を博した。その彼が晩年に本格的なオペラとして作曲したのがドイツの作家E.T.A.ホフマンを主人公とした『ホフマン物語』(1881年初演)で、ホフマンの恋の行状記(フィクション)をオムニバスの形で描いた独特のオペラである。「生け垣に小鳥たちが」

は夜会の場において精巧に作られた機械仕掛けの人形オランピアが歌うコロラトゥーラの名アリア。ホフマンはオランピアが人形であることを知らずに恋しており、アリアの途中では、ゼンマイばねが緩んできて歌が途切れそうになるたびに、後ろで仕掛け人がネジを巻くという面白おかしい情景が挟まれる。

グノー：オペラ『ロミオとジュリエット』より「私は夢に生きたい」

シャルル・グノー（1818 - 93）は19世紀フランスの作曲家で、特にオペラや合唱曲のジャンルに優れた大作を残している。旋律の美しさを生かした洗練された書法を持ち味とし、とりわけフランスのロマン派オペラの流れを作り出した功績はきわめて大きなものがある。彼のオペラではゲーテの原作による『ファウスト』がとりわけ有名だが、シェイクスピアの原作に基づく『ロミオとジュリエット』（1867年初演）もグノーのロマンティックな音楽性が如実に現れた名作だ。「私は夢に生きたい」は第1幕でジュリエットが歌うアリア。まだロミオと会う前の純な彼女がもっと青春を楽しみたいと歌うワルツ風の曲で、軽やかなコロラトゥーラの技巧が生かされている。

ベッリーニ：オペラ『夢遊病の女』より「ああ、信じられないわ」

ヴィンツェンツォ・ベッリーニ（1801 - 35）はイタリアの初期ロマン派オペラの作曲家で、短い生涯に叙情美溢れるオペラを残した。『夢遊病の女』は彼のそうした美質が如実に現れた名作で、若い地主エルヴィーノの婚約者アミーナは、夢遊病のために領主の寝室に夢うつままに入り込んでしまったことでエルヴィーノや村人たちから誤解され、婚約を破棄されるが、最後は真相がわかってハッピーエンドで終わる。「ああ、信じられないわ」は終盤でアミーナが歌うアリア。夢遊状態で橋を渡った彼女は愛を失った不幸を夢うつつの中で哀感込めて歌う。しかし誤解を解いたエルヴィーノが眠る彼女に指輪を返し、村人たちの歓声に目を覚ましたアミーナは、戻ってきた愛の喜びを華麗なコロラトゥーラを駆使して表現する。

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op.64

フェリックス・メンデルスゾーン（1809 - 47）はドイツ・ロマン派の作曲家として知られるが、厳格な古典教育を受けたこともあって、その音楽には古典派の形式感とロマン的な情感表現が無理なく融和している。そのため保守的とも見なされがちだが、実は一見古典的な均整のうちに彼は革新的な試みを様々に行なっている。円熟期の1844年に完成されたこのヴァイオリン協奏曲にしても、第1楽章が協奏的ソナタ形式をとらずに冒頭から独奏が主題提示をしたり、全楽章を連続させたりなど、従来の古典的な協奏曲様式を打ち破る試みがなされている。しかしそうした革新性を感じさせないくらい均整のとれた造形が図られており、その中で豊かなロマン性が流れ出るところに彼の美質が発揮されている。曲は彼が指揮者を務めていたライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスター、フェルナンド・ダーフィットのために書かれ、ダーフィットから奏法上の助言を受けたこともあって高度な演奏技巧を生かした傑作に結実した。初演は1845年にダーフィットの独奏でなされたが、その後メンデルスゾーンは作品を改訂し決定稿としている。

第1楽章（アレグロ・モルト・アパッシオナート）は前述のように管弦楽提示部を置かず、独奏が甘美でどこか切ない第1主題をいきなり歌い始める手法が当時としては斬新。カデンツァをコーダの前でなく展開部の終わりに置いた点も新機軸である。第2楽章（アンダンテ）はロマン的叙情に満ちた緩徐楽章。中間部では独奏が重音奏法でトレモロ風の伴奏音型とその上の主旋律を同時に奏で、主部での憧憬的な叙情とは対照的な心のおのきを表現する。第3楽章（アレグレット・ノン・トロップォ～アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ）は前楽章の中間部主題に基づく短い序奏の後、飛び跳ねるような軽快な第1主題とともにソナタ形式の快活なホ長調の主部に入る。展開部では新たな主題も出現し、これは再現部では第1主題の対旋律として用いられる。ヴァイオリンの技巧を生かした鮮やかなフィナーレだ。